

## 秋彼岸追悼の文

本日ここ琵琶湖湖南の淨刹 東方山安養寺観音堂において秋彼岸中日の佳日をかじつとし彼岸追悼法会をぼく厳修する。

二十日より彼岸入りを迎え、安養寺境内周辺も彼岸花が咲きほこる。この花はインドの古代の言葉梵語から曼珠沙華と呼び、天上に咲くという花なり。

見るものの心を柔軟にする。日本では田のあぜ、墓地など人家近くに自生して秋彼岸になると燃えたつような赤い色の花を咲かせる。地上に赤い花そして空は

澄みきって夕日が茜色あかねいろに染める。その輝きの中に、

見送った人、もう一度会いたい人などを思い想ううら寂しい気持ちになる秋彼岸なのである。

思えばこの世である此岸での別れは、誰もしがんが悲し

みの底しずに沈む。そのなかから悲しみを越えた世界の

彼岸ひがんで、いつかまた出会えるという希望があれば、心

は強く支えられ、生きていくことが出来るものなのである。

仏教の生まれたインドの古くからの思想に「輪廻りんね」、

輪廻てんしやうが転生じやうりするという定理がある。転生とは、六道ろくど

にわたって輪廻りんねすること、

「いのち」ある者が亡くなると、また、他の「いのち」へと生まれ変わり、丁度あ

たかも長いものを曲げて円まるくした輪わのように、始めと

終わりがなく、ぐるぐると永遠にくり返されるとい  
のである。

たとえ人が亡くなったとしても、その後、必ずしも

再び“人”へと生まれ変わるとは限らず、①地獄じごく

つまり罪を犯した者が死後に赴おもむく最も苦しみの

多い世界②餓鬼がき―飲食物を得られない飢餓きが

状況じやうきやうの世界③畜生ちくしやう―あらゆる動物の世界④

修羅しゆら―血気さかんで争いを好む鬼神の世界⑤人

―私どもの人間界⑥天―神々が住む世界をいうこの六つ六道の世界を、めぐり廻り続けるといわれる。

そこで、仏教は、この「輪廻」から抜け出すことを目標にするもので、事実、戦争や自然災害など世界情勢に目を向ければこの「六道」は、まさに現実世界として私共に迫<sup>せま</sup>ってきているのである。

歴史として人類の何千年かの営みの中で、先人たちが、「さとりの世界」「やすらぎの世界」すなわち「彼岸」に憧憬<sup>しょうけい</sup>、あこがれを抱いたのも無理からぬことである。

ここで仏教の五字熟語に「歩歩是道場」との教がある。一歩一歩を歩いてさとりの彼岸へと渡ることをいう。

「さとり」とは、外で修行して求めるものでなく、日々の歩みの中でみつけるもの、いただくものである。「悟り」といえば大げさだが、気づかなかったことに気づかさされ、見えなかったものが見

えてきたといえる。

「悟り」を「幸せ」と置きかえてもいい。日々の歩みが続くことでその人の道ができる。一本の道があつてその道を歩むのではなく、歩んだあとにその人の道ができる。平安な日々ばかりではない。思いもよらぬことにも出遇い、なんでこんな目にと思ふこともある。それでも歩んでいくから道ができる。山あり谷ありの道だったとふりかえる。投げ出したくなる時もある。でも自分の心次第である。あきらめたらそれまでのこと。その道は終わってしまふ。

道は人生そのものなのである。

「生きていることが奇跡だ、と思えたら幸せはいっぱいある」と難病に生き二十四才で七くなった長島千恵さんのことばがある。絶望から立ち上がり、命をかけての生き方から生まれた救いの尊いかんき歡喜、希望に満ちあふれたことばである。

思うに私は前世が何者で、また六道のどの世界にいたのかあつたのか全く分からない。しかし、この私自身両親の間に生まれ、そして子供たちと

共にこの人間界で縁あって親子として出会った  
という事実は、稀有けうなこととて奇跡に等しいことに  
間違いない。

「お彼岸」にこうして安養寺にご参詣され、観  
世音菩薩の宝前において、お経をご唱和され、ご  
詠歌を拝聴し、ご先祖をご供養されました。熊谷  
俊亮ご任職からお慈悲にあふれたお話をいただ  
かれました。お心を安らぎご自身をすっかり見  
められました。尊い大切な時を持たれて謹しんで  
大慶に存んじ上げ申す。

益々

家内安全 息災延命 子孫長久  
家門繁栄 乃至法界 平等利益

平成二十九年九月二十三日

京都府向日市寺戸町西垣内

亀光庵

沙門 土口哲光

敬って白す